

常光寺々報

2020. 春

春彼岸会法要

三月十七日(火)

朝十時半～十二時

昼一時半～四時

武蔵野大学准教授

講師 前田 壽雄 先生

三月二十一日(土)昼一時半～

当山 住職

光輪法座 三月三日(火)一時半～

法話 住職

三月の安らぎ法座と

四月の光輪法座はお休み

✿花まつり✿四月四日(土)十時半～

安らぎ法座 四月二十三日(木)十時～

講話

副住職

講師紹介

ご講師の前田壽雄先生には、三回目のご縁をいただきます。先生は難しい病気を抱えておられますが、とても精力的で、若々しい先生です。今は横浜にお住まいですが、ご出身は北海道だそうです。どうぞお誘い合わせて、お参りご聴聞いただきますよう、ご案内申し上げます

住職継職

私(住職)は、もうすぐ七十五才になります。『後期高齢者』とやらで、



車の免許も講習があるそうです。免許証を返納しようか迷っているところです。

そんなこともこんなこともあって、住職を退任し、息子の亮慧に譲るこ



とになりました。継職法要は改めてご案内しますが、五月九日、十日の二日間を予定しております。ご講師は、元中央仏教学院院長

白川 晴頭先生です。

あらかじめ、ご予約ください。

※コロナウィルスが流行しております。これ以上状況が悪化した場合、お彼岸法要の中止も視野に入れております。中止の場合は、ハガキでご連絡いたします。ご理解ください。

源左さんと直次さん

晩年の源左同行と山名直次さんとの対話は、心あたたまるものがあります。病の床に就いた直次さんに、一向に念仏を称えないことを心配した娘のこのさんが「ちったあお念仏をとなえ

なはれのう」と催促します。それを苦にした直次さんは、娘を源左さんのところへ訪ねさせるのですが、同じく病床に在った源左さんは「念仏は称えんでもええ、親様が必ず助けると言われたら、まちがわんけんとう」と語ります。

直次さんは、再度源左さんに、病床にあつてもよろこべるかどうかを娘に聞きにやらせるのですが、源左さんは「病いの方がえらいだけ、よろこびが出んがのう」と答えます。

幾日か過ぎて、「源左は念仏称えんでもええと言うたが、称えさせて貰わいや気が済まんがや」と源左さんに伝えると、すかさず「出る念仏は抑えんでもええ、出ん念仏を無理に引つ張りださんでもええ、助けにや、おかんの大願じやけのう」と源左さんが答えます。この逸話は、いつ聞いても有り難い話

です。

源左同行は、昭和五年二月二十日の早朝に往生を遂げました。八十九歳でありました。その翌二十一日の夕暮れに、直次さんは「源左に抜けられたわい」と言いながら、八十六歳にして世を去ったのであります。この二人の会話を通して、私たちは、真宗の救い、真宗の念仏の何であるかがよく知られると思うのです。

ほとけさま

一年生 尚子

「ほとけさまは、まいにちたつていてあしがいたくありませんか。ほとけさまのむねはおおきいですね。ほとけさま、まいにちわたしたちをみていてくださって、ありがとうございますます。」

これは、「ほとけさまとはどんなお方だと思ふ？感じたままを書いてごら

ん」と言われて書いた小学校一年生の尚子ちゃん感想文です。この子にはほとけさまがイキイキと生きていらっしやいますね。

胸のうち

『わが手足 摩するが如く胸のうち、撫でて治むる人はあらずや』

これは九州大学名誉教授で、中国文学の第一人者、目加田誠さんの詠まれたものです。氏は、十数年来、心臓を煩つて入院を繰り返して、視力は衰えて読書も出来ず、老齢の身を臥せながら、短歌を作り続けられました。

また、氏にはこんな絶唱があります。『誠よ、もうよいではないか。早くおいで。皆が待つてるよ。と母の声する』

